巻頭言

「情報災害」ということばをご存知だろうか。林智裕は，「誤った情報により助かったはずの存在に犠牲と被害をもたらす災害」（林智裕：「正しさ」の商人，徳間書店，p.19，2022）と定義している。本書ではその一例として，HPVワクチンについて紹介されている。HPVワクチンは子宮頸がんの予防効果が実証されているにもかかわらず，マスメディアがセンセーショナルな問題提起を行ったことをきっかけに，合理的な根拠がないまま国による接種勧奨が中止されてしまった。接種勧奨が再開されるまでに8年もの月日を要したが，その間に毎年1万人以上が子宮頸がんに罹患し，3000人余りが亡くなったという。

私たちの研究成果はいつの日も，こういった誤った問題提起に使われ，情報災害をもたらす可能性がある。これは必ずしも人の生命にかかわるかどうかに限らず，誰かの判断を誤らせてしまうことが問題である。林はマスメディアが「風評加害」に加担する構図を危惧しているが，私たちが気を付けなければならないのは自身の研究成果がマスメディアにどのように利用されるかだけではないはずである。

20年ほど前，私は博士課程の学生である傍ら，週4日は本学で演習助手として勤務していた。当時，本学の教員であった故・岡田ロベルト先生には，専門分野こそ違えど，私の学位論文の進捗を気に掛けてくださっていた。「博士号なんて，“足の裏の米粒”（取っても食えないもの）なんだから，さっさと取っちゃいなよ」などと，ロベルト先生は私に発破を掛けてくださった。たしかに博士号を取り終えてしまうと，それはただの通過点でしかなく，一定の研究能力を証明するものでしかないことがわかる。そして，これは決して免許証ではない。

研究者の役割は，基礎研究を地道に遂行すること，研究成果を社会に役立てること，人類の未来を指し示すこと，など多様である。その1つの振る舞い方として，マスメディアや地域社会と深く関わることもあり得るだろう。ましてや，教員評価のような尺度でみた時には，マスメディアへの露出度が高く，地域貢献の実績が多いほうが都合がよいともいえる。しかし，本当にこの迎合的な姿勢が正しいのだろうか。

私たちの科学的な知見は，エンターテイメントとして消費される情報に置き換えてしまった瞬間，風評加害者に加担し，情報災害を生むリスクがあるといえる。林によると，マスメディアの振る舞いとして「危険性を強調して不安を煽る」データの扱いや，「誤読や誤解を多発させる」記述などがそれに当たると説明しているが，これは研究者にも当てはまるだろう。「災害」を食い止めるために，正しく振る舞えない研究者の権利を停止したり剥奪したりすることで事態を収める方法はあるだろうが，研究者には免許証がなく，正しい制御方法ではない。私たちは研究者としての免許証が存在していないことの意義を適切に理解し，倫理観をもって振る舞うことで，こういった「災害」は起こらないはずである。

この研究ジャーナルは，私たち研究者による真理の探究の成果であるという信念をもって，世に送り出したい。

(宮城大学研究ジャーナル2巻1号編集委員長　小地沢将之)